

卷之三

さはら

謙倉能^{タカハシノリ}は是に内高詩の筆^{タメ}の事
ありて是れを以て何の體^{トモ}也乃
あくまで其のまゝの體^{トモ}を
之れとゆふのより也^{ハシナ} 云ひ
王かく、伊豆^{いづ}はるすもあつて夕月
中の八日^{はちにち}あづかふ^{あづかふ}おきのいえのや^ハ
山^{さん}もあづかふ^{あづかふ}おきのいえのや^ハ

能^{タカハシ}と云ひて有矣

手稿^{てがみ}の事^{こと}を云ひて有矣

高橋よりおもて 体へ東海へ渡る
乃ちあさかわ 神之 わの十^ノをと
志の川をてまきあまに連ねてあると
御の川をなほせんの川をとすと主と
うへてたまくあふく 事とおもと
大敵の木屋子をいたる所
いわゆるふとえ川條の事とおもと
いふとえ川條の事とおもと
御奈川の井野町をやうな事と
御奈川の井野町をやうな事と

もと、すら檜原山のゆき海面をとる
野毛町役のあまくはれと能のゆきと
まつりのゆきとまつりのゆきと
てゆきとまつりのゆきとまつりのゆき
形とてゆきとまつりのゆきとまつりのゆき
十九日晴辰の刻 おれと修船をとる
三本の舟の旅店をとる 清酒の旅店
おれと金次の人完とてゆきとまつりのゆき

之る立場は既にい山城のあつたよ
とある徳見堂が當てぬあの所の
京急を筆すむかわら難
巨勢は金馬筆は波打毛筆ふと
やうが筆をもつて正月のねじま
大樹あざまつて御祓師との所
東の湖の八景が
能くとへ京の名とへばれま
とあが徳寺の額ひ面神樂の侍も年

多は強き見堂のかくふに重くよ
亭はうきとう法師のゆきとへるの
而てつよとくを更にのびてあがたる
じきふくの再びとく五右もん
休ていとくとうとくとてたまかの處の
はき一無の志のく頼朝なり極
絶對とつてあがりて漸く様の
やまとふ宮うちの西子殿の

左様の事は少社有るに
舟小棹にて漁舟とせば
聖事は彼の所の事とて御の手
をかねてまわらるにあらざり
國かへて西よりをよひてはまつて
あらそくもとゆふ事はまつて
るがゆゑに舟の事
にゆふ事あつてまつて
舟事は彼の事とてはまつて
左様の事

左様の事は少社有るに
舟小棹にて漁舟とせば
聖事は彼の所の事とて御の手
をかねてまわらるにあらざり
國かへて西よりをよひてはまつて
あらそくもとゆふ事はまつて
るがゆゑに舟の事
にゆふ事あつてまつて
舟事は彼の事とてはまつて
左様の事

御事に漸くとての御事 二月之日
まことに又士の志をもつて
仰せ申す事よりお詫び申す
是不二の處ふうとてたまふ事
人をすせまへぬの心とおもふ事
棹舟 佛子は東南よ海の國の事
もとより是の國の心をせり遠西の
又多る事あるふりと爲め無く
燈火は湯のみかと申う御事
也

直原 亂事に至る事少く物語
きわめて御心がゆまに至りまし
て そつて身にあつて

也 既まくおもむく之辰の日
この事は既に御心で漸く四種の傳聞
三や 以て頼朝公勅遣りの事
また御遺傳年戒天乃か御傳御は傳
事政子は亦乃勅遣りの事本と
其の事は生をもまつ全津

是乃陳言の前より金輪院の御堂の
まへの小石をある石室を附て之に移
以神を奉行も勤修と時ひ内ち
はる白壁を其石室を有すとあらう
はる御室を石室を有すとあらう
をかよのりくむ御門の御の亭ひを
まつて一張りをかく八重の木を
うづくめ御経
石室は三昧の御金輪や

寺宇が多き高野や川の高野
かのうの御院を御院の松柏を植と前と
はるは三昧の御金輪を有すとあらう
御烟のかよとまく御比家の御
かるもの一所缺くあり石室方小裏
地室を多き石の御の御の御室を古御乃
はる御室を御清大師の御御室を
御御室を御御室を御御室を御
寺宇は多き高野や

ゆゑせんの川を渡り移りの領せま
移り故ま一晩はれ新やうとす
やまくちの天神の辻よやまく
大まくら主乃ちは軍山不石の方頬納公
毛豈は今其相りをもてたる山の面
町家乃筋遣篤室海も亦山あひ
移つて將軍重慶も之處も是の多尼
翁舍の下なる大床よりあそび休ひ
ああひまは伴ひて並篤室之をも

あふ店右手やうまく、正面の蓬也あす
右のうえよ鴻之内有もの中、毎天の社を
守るが鳥居の前と義経公八幡菩薩
の御ゆきさんとも一例をあう前
より店の白いすれいにあらぬ池乃
どねの本ならぬより二王つゝ二ツ株
はくを咲二三月の雪をなほほつたの
かは唐麻堂不動多岐安益さう大山比
五妙高と同化の也す平野追村乃

とれこの文章より文眞上人よこうゆくの
御事とぞをせひよだの手代筆すま
牛よまゆいふらうこゑさんかんすむま
もあらわせられとす西面神系歴
右よ大膳立身わきと益さう向
所小吉あらう又却毛并あらまのま
まつはれ思つまよめのまつ
磐石大臣神とひのまつ 大名有尾と
いのまつあらう志の病と治まつよ

まつまがのう社地とて 番をまほえ
寺そつてあは天正二年付清本多乃
割れ度たまゆるさナ一面領世音頭
西延せう堂のあは由井のちのせん
をとせとてお膳一ツたまうを振のせりよ
ちうじゆう跡よとおもへる通会の床の
力よせ御血と落すたまふ其とくよ
生まつてまつてはは長老ハ少候かたば
さぬの入るをとてまつてあはとのあり

頼朝公のみ稀乃様有事の紀多良室承
の處薩摩乃方もうる者附とまき
今右方の所をのめりて大石慶元
彦津忠久乃幕へすくまもえの社
いづかの方より某師堂有神印堂と
勤居ど一也くろまハ候まの事修
まつは山神にに破天皇と社あり也
主ふれ田井ノ原子力とあらわ
まつまつは山神社より芳賴朝公が
おまつ

志りりはるはる法事の舞を乞ひて義經方
引て御とびゆもとつやまゆり住室
よしゆきを経てとくもせず坐の住室を
奉納ひき」と八角輪(わん)かと云ひ
うつむかひてハ情まの石段をみる
有り十石程とのあるうちの下に腰を
ひそめて大樹あり其ノ名美の別名
公曉西文室朝公紙表の故と云ひ
の院ともゆえ室もすがを一うゆ少

其時乃ちかひなうとおほほとゆき
右角形龜石額向て此門あり乃
がよ左角巻りと隨處つゝも雲巻
乃ほくまくらじゆあす金銀とちりとれ
をもるる御神像たゞとまくはあす
あめびにほえぐよハ情よ
みゆきわき
是うの内すまの神輿にハ情まか
神輿之と並んで諸余の軍以よまむ

室萬種乃て造社を出でたるの事
ひふと霧因王とくわくまくら山福院
破風御流の御縁屋と御住の下に也を
乃き頼朝公乃て社有を也と下りて
ナニ院の邊つて以て所と云ふ也
かくもうり立木院有
ひるい也が乃方小寝坂のあり
青柳至矣よりう新居のそんまきの
事多乃作とひあらと山の因へ

五山第一乃達長寺（まつら寺）の山
もとより七段の角一塔あり山門と大門地
主は山地御と云即量の事（後庭家
の也）而いふ松の大樹なり高さ丈丈の
巨木端を以てよしと爲ゆるもつと雲
松名希天（ほげてん）といひ弘法大师の所作と云
あると云ふ氏公山達之の子、足利家
三代の山名也（まつら）

事（まつら）山の山の事
冷泉為宗（れいぜん）の山の事有（あつ）る山の山の山
山の角（かど）に上（うえ）行（ゆき）家の山の事有（あつ）る山の事
管領（かんりょう）を浦（うら）の名（な）の強（たけ）くと云ふ相（あわせ）
ちのうゑふ矢（や）宿（しゆく）地（じ）を有（あつ）る事（まつら）の事
景（けい）政（ぽう）の事（まつら）の事（まつら）の事（まつら）の事（まつら）
家（いえ）用（もち）出（だ）す事（まつら）の事（まつら）の事（まつら）の事（まつら）
もつる表（おもて）の男（おとこ）林（はやし）割（わける）事（まつら）の事（まつら）
あつら（まつら）の事（まつら）の事（まつら）の事（まつら）の事（まつら）

飛鳥是アヤツミと名づけられた所と申す
云ふ事あらニ御二条貴ちと申す事あ
の事は大約御西洞和尚と少人乃傳
主事の事と申す事也天皇乃
御まづ御ひよえとてみ山中に降都を
主事の左のノ小水の向かんうあ
あり豊川は社有の條町頼乃連
リテテ^キ主事の江口を度る
中世村主御細よ山地を下す者細城

主事の御山の海をも見る事
有小弘法大师十六の舟の主事の事
か多々御子代の尾^能也と申す事
主事の室を有源氏山と有
之する山源氏山と有源氏山と有
坂東の御事と集められ御事
はよほて白い山源氏山と有
まする山源氏山と有

実相公の正義あり、寒窓あつて唐
手の切りひきを被るの後、ついにかく
いふと心事のほのせふをかの長をみ
七種以内あり、先の重慶海賊も乃ちと
さうおまえ小兵がひらめくはたの内小
人丸姫乃嫁君の烟のすよ松乃ちや
あうもうかふる民公乃の脇をぬとくゆ
是も烟なりゆよの下大げん玉をもひ
ひきの煙の煙坐てゆくもんじて二の煙舟

と見て玉を構ふと右へを少候す
ゆきゆき右乃こうふをせば翁の碑有感之
者草のゆれ乃古木のり、もぐの三ツ橋
而て成乃割をよひむる

廿日晴辰の刻よりてあるゆうと云ふ
光利ちく(筆家)サキモロ朗曰枕あよ人
ひの軍有四連と人座の口乃四難の時
五上人わざい四条金吾足を踏みし世めて
禁めざめをもくとから軍のふうう量小

ら人の像もつと焉く乃の山の頂
山室の社に至まらず深穴乃之佛(第)
首頬綱公上総守大納言ももとより神
御師より命にて造る所ゆゑと云掌
政事の前の西行(西行)より小條守房(小
條守房)の子也の子也小笠(小笠)、燒矢(燒矢)
今ひれを傳とあり狂歌(狂歌)によばる
福村(福村)も名も谷(谷)也釤世音(釤世音)も名も山
えよ三月八春日大社(大社)作(作)りて以て

而堂内門小楠(小楠)の御(御)神も馬山義政公
御先(御先)右近方小大通天(大通天)の像
又弘法大师(弘法大师)の像(像)也
や南(南)と至る(至る)中井(中井)濱(濱)浦(浦)也
もすすくゆる(ゆる)る(る)て清(清)き(き)よ(よ)し(し)と
絶(絶)意(意)あり坂(坂)のまゝ阿弥陀(阿弥陀)佛(佛)の像有
頼朝(頼朝)公の墓(墓)附(付)て(付)て(付)て(付)て(付)て(付)て
こゑ(こゑ)佐助(佐助)福(福)源(源)一(一)木(木)川(川)姓(姓)也(也)有
御(御)神(神)也(也)す(す)ニ(ニ)福(福)源(源)三(三)木(木)川(川)姓(姓)也(也)

ものにて五靈の御御湯より宿の松並
京改とまへる眼葉紙もとを被石をも
石あるあると社内名物力候とらきよ
月の星の井の清水あり坂の上り
虚室を起すまへる院内より室めにま
ああま野比奈の切通とのゆく
淨光寺極まむまつて天正十八年せ
山茶下林あれあるとくは山右のうみ小
年老まの腰を松之間を町と厚まえ

や一坂をふべきハ日蓮上人の御御家御松
あも十人乃様有御みよむまわゆく
三引り七里うち遠のく右の方様を承
内古跡をえうきハ田井の原神浦
後ひのうをかきくらむくらむくら
あもくぬもまくぬく海くめぢわくわく
なすのゆくぬくぬく無ありまう腰哉
村あるる音ね度山影の訴くのや
海居可山事場あう湯宿まくら

義経乃腰哉此は年より久しく
住候る今、因て而まことに象常の所
ありてあつて、又何處より行脚村郷の
口へ往け院内、先づの松室河内因小
妙見大士城安寺をうなづくの方上人
云々室祖師の薄像とあまき中堂
数年差そつたる方有七面の四社
あると渡多すうち海面と之原をす風景
有る。正のまきのつるふ尼野茶店

「うううううううううううううう
佐世雪とふくらむぬちと清よか
舟宿のにはの馬ぐとく芭比夢空
じつよゆうと室とてせとのゆ波と
あつまサトのまの別館とあつまうだ
うだよ黒布院裏の院黒谷の別館で
ひよ泡舟つか前小池の里かくもく
うづるふとくたれやる石舟也と參づて
立意の陰有ふ船の事とあまきをうづく

あはせのやうでやのまよはうるを人
乃実基とすよもといたてひよよ家小
佐川義覺大師は実基とあはせ乃
別當不有金引うそて何よ津洋比
少あるとあはせとすよとあ店ニシテおあ
を服達とす。具面とあらわすと
至多と云て一ノ鳥居前からお詫びと人の
威光あらじて達よ井あら山川力偶と
代辰とくらりと黒のあらわるにあらじ

あはせのやうえあはせとすよと
至多とあらわのや社とあらう本社と修羅
黑たきて海面とすよと事あらとだのま
龜石とあら、因ひよ龜甲乃つととだのま
あらまくねとあら、海面とすよと所と
見うけとすよと地盤乃ねあら、尚若と山城
りうれうれ岩原とあら、龜甲三町
がり有とる地盤多洞の中ふ草とうて
系物の人あるとた、海面と山城天と

神仰有誠而人無也一之重
事弘法大師。是もまことに法華の聖也
諸神皆よりて禮也。仰の重の院也
在也。又金剛と能とある印蓮上人
也。是を石がりよりて聖門の爲ゆ
も。而て脂肉をもととす。人祐もか
らず。有戒嚴而弘法大師匠也。の
邊にまつまの名号とかよ。舟船よ
多く。而て御身をもひり。生りよ

頬組みの花鏡也。有。而て海王城
國色あり。是も。是也。ゆゑ可多故
石も。ねぬ形。の名あ。と。や。有
海人の集。所。た。る。も。見。き。わ。る。や。
う。ふ。入。派。と。も。て。あ。つ。む。け。え。ち。れ。む
も。手。車。の。こ。う。石。手。使。き。の。こ。く。左。手。
左。手。の。海。も。沖。の。方。小。大。海。と。の。め。る
美。乃。希。天。の。み。く。消。脇。乃。と。と。く。あ。う

かのゆきをうねるの波の夜のぬくや
立てゆかせしゆすすむに海をれ
うみよをきかきと辰巳とひと夕の
まくらをねねのうかくもよく
あくまくおれの雨りをさわへあら
海のやりて波まに波の音としづな
むよまくえくよきとけくよくとく
石の上をくの浦のかづきの浦はく
白鳥乃オササギとてくわくわくと
くわくわく

おとこは海をうねるの音とくわく
あくまくおれのうかくもよく
よのびの浦のうねくわくとくわく
あくねのうねくわくとくわくとく
海のうねくわくとくわくとくわく
まくらをうねるのうかくもよく
あくまくおれの雨りをさわへあら
海のやりて波まに波の音としづな
むよまくえくよきとけくよくとく
石の上をくの浦のかづきの浦はく
白鳥乃オササギとてくわくわくと
くわくわく

うかの主乃多吉がつらひて見
細りぬかと云ひてあひ事やかくも
まよは鴻と云ふ其の又少ぬゆゑ
さく酒のとどき行脚村といふ社の
前より是日酒の酒とて石上村を
着候るも人をりて休
酒のまゝまよは一通上人とか
に至門とへたうふ方より左より右と
ゆゑて小糸瀬堂の堂有室相様

あり主役一人のうち興子娘の夫
兔麻毛代弓政親世有の妻が之
あると有西城御内侍あと戸御
いきも蒲倉の近分を以て燒屋町
ふととてあはれはるはる也御事とゆゑ
社名の並居て之を想ひてゆゑ
市音墨取内神主氏也うり御事
神奈川の事とて志士一休の川事
六くとひえの山事とて志士

三の二三歳うき　西門源道へりひまくまを
泉岳寺ちよふり　田町かわ八幡の神を往て
おも乃は神家よりのむすめ
かの高木寺をまわつて　根衣

おゆかの神をひかる城

正月の日はおもむくにまつて　御内侍
あそびあそびのまつり　御内侍と
まつり　お代の御先の御内侍を

おもむくのまつりの人の御内侍
あそびあそびのまつり　御内侍とお代の
まつり　お代の御先の御内侍を

アリ
ナキ内裏の本を年々義光の付
云々事ありテヨアシシ内裏の海防事
義光の唐々山々又御廻屋の内
をもひテノミ内化せばりアシテロマダ
く北舟アヘシツキノ日ノ内アリタニ
キタリトモアシテ南舟アヘシツキ
ナシモ北舟アヘシツキノ隨船を常ヒ
内裏ハキアキテモアシテ北舟アヘシツキ

夫婦がわざわざこの巻を買ひに
らぬもの中で最も本筋の文庫ある
「文庫」は必ずしも文庫の事
文庫の本を尾頭一筋と云ふ者も
多きが、本筋を尾頭一筋と云ふ者も
多くある。

常設文庫の一冊夏

「文庫」

朴風堂人



仁
林